

近世神社領における三つの石高の性格

——大山崎離宮八幡宮領を素材にして——

田上 繁

はじめに

天王山を背後にひかえ、木津川・宇治川・桂川の三川が合流する大山崎は、古代から西国街道・淀川交通の要衝として重要な位置をしめていた。また、中世には、油座の本拠地として栄え、油神人による自治的都市共同体が形成されていたといわれる。近世に入ってもその当初は神人Ⅱ地侍衆による共和政治体制が続いた。土地制度の面でも、江戸幕府からその領地を離宮八幡宮領として安堵され、形式上近世的な所領形態となったが、彼らの在地領主的土地所有権はそのまま認められたと指摘されている。⁽¹⁾

本稿では、そのような特異な変遷をたどる離宮八幡宮領において、近世社会の根幹をなす石高制がどのような形で貫徹するのかといった問題を取り上げその実証分析を試みる。その場合、離宮八幡宮領では一つの土地に三つの石高が設定されているという事実に着目し、それら三つの高の性格づけを行うことから始める。とくに三

つの高の機能面の分析に力点を置いて論及する。石高の性格規定に関しては、これまでも膨大な研究の蓄積があり、そこでは、生産高をあらわすもの⁽²⁾、年貢高をあらわすもの⁽³⁾、「算面」のつくりもの⁽⁴⁾など論者によって見解が分かれる。中でも石高の性格規定の問題に限定した場合、神社領を素材とした研究はほとんどなされていないのが実状である。本稿で神社領を取り上げたのも、そのような理由による。なお、本稿では、とくに断らない限り、神人Ⅱ社家の系譜をひく正田種信家文書を考察の対象としている。

一 離宮八幡宮の所領高と土地構成

中世に大山崎惣中として地縁的共同体を形成し、自治的運営を行っていた大山崎荘は、近世に入っても、その当初においては神人Ⅱ侍衆の土地所有権が認められたといわれる。⁽⁵⁾ 大山崎荘は、天正一七（一五八九）年の秀吉検地、慶長六（一六〇二）年の徳川検地を経⁽⁶⁾て所領地が安堵されたが、その所領高は内積高として設定され、名

目上は無高として扱われた。その所領高については、惣中が存続しても、表面上は離宮八幡宮という神社が領主権を持つといった形が取られた。そこで、元禄一六年（二七〇三）年の石高配分をうかがうと、神供祭礼分一〇七石、寺

庵分（四八か寺）一八七石六斗八夕、社僧分（二〇か寺）一一四石七斗五升九合二夕、社家分（二〇人余）五四五石七斗五升三合二夕で、全所領高は九五五石一斗一升三合二夕となる。最も大きいのが社家分である。この元禄一六年の土地の種別を基礎にして、離宮八幡宮領の土地構成を図示すると、図1のようになる。

離宮八幡宮領の土地構成は、同図で示す通り、神供祭礼分、寺庵・社僧分、社家分の三つに大別される。神供祭礼分は、米分と次分、いわゆる神田からなり、それに灯明分が含まれる。灯明分は、社家や寺庵・社僧から寄進された土地であるといわ

図1 離宮八幡宮領の土地構成

社家分		寺庵・社僧分		神供祭礼分	
役 田	五歩＝田地・地子	五歩＝田地・地子 (48 か寺)		米分（神田）	灯 明 分
		五歩＝田地・地子 (10 か寺)		次分（神田）	

れ、離宮八幡宮の直領の一部を構成するが、元来は社家や寺庵・社僧の土地であることから、厳密な意味では神田とはいえない。ただ、灯明分の年貢は離宮八幡宮の灯明油を賄うためのものであるため、図1では神供祭礼分に含めた。この神供祭礼分は、離宮八幡宮の直領ともいべき土地である。そのうち、米分・次分は、宝暦七（二七五七）年の史料に「此地面ハ御神田ニ而銘々請負」い、「御年貢相立」るものであって、「掛り物」ではないと記されている。その記述から、米分・次分は神田であり、年貢地であったことが分かる。そして、この米分・次分は、基本的には社家がその年貢を請け負うことになる。年貢算定に際しては、米分・次分＝神田の高そのものが年貢高となり、銀換算されて納入された。

注目されるのは、社家が支配する五歩の土地が最も多いことである。この五歩は、宝暦七年の同じ史料中に「此地面ハ売買徳之地面」で、「御年貢地ニ而ハ無之」く、「掛物」であると注記されている。この土地は、売買の対象となった土地なのである。また、米分・次分とは異なり、年貢地ではなく、掛りものが課せられる土地であった。もともと五歩という名称は、社家や寺庵・社僧の所領地の掛りものを算定するとき、五歩の比率で課せられたことに由来するものと推測される。その五歩掛りという掛りものの名称が、次第に五歩の土地として把握されるようになったのである。売買される土地ということでは、この五歩は、社家領や寺庵・社僧領といった在地領主的な土地所有権に近い性格を有する土地であったといえよう。大山崎荘の場合、耕作者である百姓は高持百姓とはならず、請

作人としてのみ存在したといわれている⁽⁸⁾。その意味では、社家は、神田の名請人として、また、五歩の土地支配者として存在していたと考えられる。近世中後期に至っても、五歩の土地の売買が頻繁に行われており、その土地支配に対する社家の立場は、惣中の支配から一定程度自立性を保持していた。その五歩の水帳石高が実際の高の十分の一に縮められて機能していたことは、すでに指摘されている⁽⁹⁾。

ところで、正田家には、惣中印が捺された「地子田地要脚之事」と標題のある書札が三〇〇通ほど伝存する⁽¹⁰⁾。初見は元和三（一六一七）年で、以後天保一〇（一八三九）年まで断続的に残っている。その書札には、土地名義人の名前と田地・地子の石高が記入されている。そこに記された高は、五歩の土地の高を十分の一に縮めた高である。この田地・地子高は、正田家が惣中に納める負担額を明示したものである。社家は惣中の成員として惣中を維持、運営するため、この書札に書かれた田地・地子高を負担しなければならなかったのである。これは、正田家が買い求めた五歩の土地が惣中から同家の支配地として認められ、一方で、その田地・地子高を惣中に納めるという義務が生じたことを意味する。このようにさまざまな性格をもつ高が、どのような基準で設定され、また、機能したのか次節以下で詳しくみていくことにする。

二 水帳石高と宛高の性格

正田家には、一筆ごとの土地の内容を詳細に記した「家領水帳」

が伝わる。この土地帳簿は、追記分も含め寛延二（一七四九）年より明和四（一七六七）年まで同家が相伝し、あるいは買得した土地について書き上げたものである⁽¹¹⁾。その中から一〇筆の土地を選んで

表1 正田家の「家領水帳」にあらわれる高の種類

字 名	種 別	水帳反別	水帳石高		宛 高		宛米高
			石	実質高	石	敷地掛り	
①芝走	神田次分	反 2.216 半	0.885	石	3.35	4 歩	石 3.7
②上之芝走畑	神田次分	畝なし	0.25		0.4	4	0.75
③中岸畑	神田米分	0.428	0.378		0.6	6	0.57
④高田田	灯明分		0.4		1.45	4	1.45
⑤三奉行畑	五歩	1.2	0.036	0.36	0.5		0.7
⑥□くほ	五歩	0.62	0.05	0.5	1.2	6	1.396
⑦高田	五歩	0.8	0.09199	0.9199	1.05	4	1.05
⑧下岸畠	五歩	1.300 半	0.0925	0.925	1.15	6	2.3
⑨井尻町屋敷	五歩	0.203 半	0.038	0.38			0.36
⑩岩上町屋敷	居屋敷故赦免	0.308					

注1)「家領水帳」より作成。

注2) 単位は、反別が反・畝・歩、石高が石・斗・升・合・タ・才である。

表にまとめたのが、表1である。

同表を一瞥すると、一つの土地に、水帳石高、宛高、宛米高の三つの高が設定されているのが確認される。なお、字名の①から⑧までの耕作地については、米分・次分、灯明分、五歩の区別なく三つの高が定められている。屋敷地や役田を除き、どの土地も三つの高の設定に関しては、同じ条件であった。五歩の土地は、水帳石高ではその水帳石高のほか実質高も記載される。その水帳石高は、いずれも実質高の丁度十分の一の高である。屋敷については、⑩岩上町屋敷は「居屋敷故赦免」とあって、三つの高のいずれも設定されていない。これは、正田家の住居であるため、すべての諸掛りが免除されたことによる。また、⑨井尻町屋敷に水帳石高と宛米高が定められているのは、貸家として他人に貸し出す屋敷地であったからである。そして、⑨・⑩とも宛高がないのは、屋敷地が後述する田地に含まれないためである。

さて、三つの高のうち、宛米高については次節で触れることとし、本節では、水帳石高と宛高の性格を追究する。まず、水帳石高であるが、同表のうち①芝走の土地の記載内容を示すと、次のようになる。

字芝走

一 神田次分高合八斗八合五夕出ル

内 (貼紙) 「難知レ何方より参り申候哉 古来より当家家領也」

(内訳の六筆省略)

メ 式反式畝十六歩半

右在所水帳面也

正田三郎左衛門と有

右地面絵図

田 一 此宛米三石三斗 (貼紙) 「壹石六斗五升」

五位川保 五兵衛 高天 伊右衛門

畑 一 同壹斗五升

伊右衛門

畑 一 同式斗五升

五兵衛

右二口地荒之時より皆無、地面能成申候は見分之上年貢申付ル筈

○ 右三口二而三石三斗二宛ル

但田地要脚・石かけ等ハ三石三斗五升之積り可出之事、内野新井地敷懸りハ四歩也

右の①芝走は、水帳反別二反二畝一六歩半、水帳石高八斗八合五夕の次分「神田の土地である。そのことは、史料中に「右在所水帳面也」と記されていることから知られる。この水帳石高は、在所惣中の成員同士で認識されていた高である。前出の宝暦七年の年貢と諸掛りを書き上げた史料によれば、正田家は、米分二石二斗四升九合一夕、次分四石八斗一合九石、五歩二石三斗三升七合七夕八才(ただし、五歩の土地は実質高の十分の一の高)を所持、ないしは支配していた⁽¹²⁾。米分と次分が神田高「年貢高であり、五歩「田地・地

子が掛りものの高である。掛りものとしては他に堤銭がある。しかし、堤銭を負担する土地が、米分・次分や五歩などの他に存在するわけではない。堤銭は、米分・次分＝神田と、五歩＝田地・地子のうち、土地の種別にかかわらず、川沿いの耕作地（役田は除く）に課せられたものである。これらは、正田家分の神田年貢、五歩掛り、堤銭として、「年中所入用に相成、貫首より取集メ、極月六日ニ在所へ御取立」てられた。この宝暦七年には、銀に換算して銀四五一匁余が在所＝惣中に納められている。⁽¹³⁾

このように、水帳石高は、在所＝惣中に納入する神田年貢や五歩掛りなどを算出するときの高として機能した。天正一七年に検地が実施されたとはいえ、それは「指出検地」による高であり、したがって、土地の生産力をあらわす高ではない。この水帳石高は単に計算上の高に過ぎず、社家の支配地である五歩の土地については実質高の十分の一を掛かりもの高として設定し、また、社家が請け負う米分・次分＝神田についてはその高に相当する高を年貢高として定めたのである。なお、直接、在所＝惣中の財源になるものではないが、幕府から課せられた「馬借用掛り」と「国役掛り」も、この水帳石高が算定基礎となった。五歩の土地に掛けられる諸掛りや、米分・次分の神田に課せられる年貢の算定基礎となる水帳石高を極端に小さく設定するのも、社家自らが負担するものをできるだけ軽くするという意図が働いたためと考えられる。それはまた、土地に対する社家の権利の強さを示すものである。

次に、第二の高である宛高について検討を加えてみよう。右に引

用した①芝走の末尾に、「田地要脚・石かけ等」は三石三斗五升と書かれた文言がある。宛高は、史料によって「田地石掛り高」、「宛高」などといった名称であわられる。先の宝暦七年の史料には、正田家の「敷地年貢石掛」⁽¹⁴⁾を算出するときに、石高に対し「四歩」や「六歩」といった比率で計算することが記されている。その注記に「宛高壹石ニ付如此掛り申候、立毛ニ掛り申候」とあり、この算定の基礎となった高が宛高であったことが分かる。①芝走の場合、宛高が三石三斗五升で、敷地石掛りの比率が四歩であった。その掛りものの対象となった敷地は、「内野新井地敷」である。

ところで、この「内野新井地敷」に関連して、「内野田地」という名称の土地が存在していた。伝存史料から、文化三（一八〇六）年八月にその「内野田地」の石高改めが行われたことが判明する。

この石高改帳は三冊一組で作成され、そのうちの「中之上・中之下内野田地石高改帳」と「下之上・下之下内野田地石高改帳」の二冊⁽¹⁵⁾が現存する。いずれも一筆ごとに石高と名請人名が記帳され、等級別の合計石高が書きとめられている。文化期ごろに作成された「上田地割合覚」⁽¹⁶⁾には、各等級の石高内訳が記されており、その「下ノ上」の高は、「内野田地石高改帳」の「下之上」と同じ一〇〇石五升三合で、「下ノ下」の高も、「下之下」と同じ九五石一斗一升五合となっている。そのことは、「内野田地」と「上田地」が同じ土地であったことを意味する。この高が、宛高として敷地石掛りなどの算定基礎となったのである。

しかも、宛高は、上田地中・下田地中・川表田地中のそれぞれの

田地中によって設定されたものである。さらに、不作による宛高の上中下の調整は、田地中自らが実施する毛見Ⅱ「内見」によって行われた。他に文化三年六月に行われた上田地中の毛見史料が残っており、そこには、「高下合印六段二割」とあって、一筆ごとの土地が上ノ上、上ノ下、中ノ上、中ノ下、下ノ上、下ノ下の六等級に区分されている。この毛見の結果を記録したのが先の三冊一組で作成された「内野田地石高改帳」であることは、多くの説明を要しないであろう。このように、各田地中は、水帳石高とは異なる高Ⅱ宛高を設定し、必要に応じて毛見を行い、作柄によってその等級を調整したのである。その前提として田地中によって土地の測量が行われたものと予測されるが、現在のところ、それに関する史料は見出せない。したがって、その高がどのような基準で設定されたか断定しえない。

さて、この宛高は、「敷地年貢石掛り」と「廿三日用掛り」を算定するときに用いられた。⁽¹⁷⁾前出の宝暦七年の史料から、正田家が納めたこれら二つの掛りものの内容が把握できる。まず、「敷地年貢石掛り」の基礎となる高は、場所の違いから三口に分けて書き上げられる。それらは、八石五斗、一五石二斗二升五合五夕、一石四斗五升の三口で、合計高は二五石一斗七升五合五夕となる。四歩、六歩などの比率は、各田地中の「悪水抜挾井路」の劣悪状況によって決まる。そして、この「敷地年貢石掛り」は、「宛高壹石二付如此掛り申候、立毛二掛り申」すと注記されるように、宛高がその算定の基礎となった。正田家では、この宛高二五石一斗七升五合五夕を

基礎にして、四歩、六歩などの比率で「敷地年貢石掛り」を算出している。そのあと、銀換算した銀四五匁余が「上田地中」へ納められた。毎年一月二三日に徴収されたことに因んで名前が付けられた「廿三日用掛り」でも、宛高二五石一斗七升五合五夕がその算定の基礎となっている。この宝暦七年には、「内野田地宛高」一石当たり銀二匁八分が掛けられ、銀七二匁余が「内野田地二付、年中諸入用二相掛り申」すとあって、内野田地Ⅱ上田地中に納入された。この「廿三日用掛り」は、史料にも注記がなされているように、上田地中の諸入用を賄うために集められたものであった。

これら二つの掛りものの算定基礎となった宛高は、前述したように、田地中と呼ばれる集団によって設定された高である。従来の研究では、この田地中の存在や役割についてはほとんど等閑視されてきた。上述したように、田地中では、宛高を調整するために、独自の毛見を実施して作柄の等級を決めていた。田地中は、その高で計算された「敷地年貢石掛り」と「廿三日用掛り」をすべて当該田地中の収入とし、それを財源として田地中に属する土地の維持、管理を行ったのである。そこでは、水帳石高はまったく機能していない。宛高は、水帳石高が計算上の高であったのに対し、土地の測量や毛見に基づいて定められた高であったと考えられる。その高は、次節で検討する、地主取分としての「年貢」と離宮八幡宮の年貢⁽¹⁸⁾(米分・次分Ⅱ神田の場合)、ないしは在所Ⅱ惣中などの諸掛り(五歩の土地の場合)からなる宛米高と比べると、表1や後出の表2とも宛高の方が全体的に小さいが、表1の④高田田や⑦高田など同じ高のも

のもあり、ほぼ宛米高と近似となっている。そのことは、宛高と宛米高が、その高設定において同じ基準で行われたことを示唆する。

三 宛米高の性格

(1) 宛米高の実態

これまでの分析で、離宮八幡宮領の土地には、一つの土地に水帳石高と宛高の二つの高が設定されていた事実を知りえた。しかし、その二つの高だけでなく、もう一つ宛米高という高があった。史料によっては、「宛口高」、ないしは単に「宛口」などと記される場合もあった。また、本稿で第二の高として検討した宛高と同じ名称で呼ばれることもあった。そこで、寛政五(一七九三)年十一月の史料⁽¹⁹⁾を利用しながら、この第三の高である宛米高⁽¹⁹⁾請作高の性格を究明することしよう。同史料には、八つの字の土地について、一筆ごとに種別、水帳反別、水帳石高、宛高、宛米高反別、宛米高、請作人が記帳されている。その八筆すべての土地の内容を表示したのが、次に掲げた表2である。

この史料にあらわれる土地は、この時期に正田家が他の社家中氏から購入したものと推測される。それは、前出の「家領水帳」にはまったくあらわれず、また、これら八筆の年貢収納状況を記した後年の嘉永五(一八五二)年、同六年の「⁽²⁰⁾収納米取立」帳の標題部分に、「中家」「中氏」などと注記がなされていることから裏付けられる。同表をみると、ここでも一つの土地に三つの高が設定されていることに気付く。まず、種別は、神田の米分・次分と、売得した五

表2 寛政5年「反畝歩・宛高覚」にあらわれる高の種類

字 名	種 別	水帳反別	水帳石高	宛 高	宛米高反別 内 訳	宛米高	請作人
①きし畑	米分	反 0.428	石 0.244	石 上 田 地 2.1	反 1.62 畑 0.727 田 0.806	石 定納 0.5 1.2	五位川保 清 兵 衛 五位川保 清 兵 衛
②白才味	米分	0.802 半	0.5	上 田 地 1.4	1.101 堤根ノ方 小まち 0.807 0.224	1.62	五位川保 清 兵 衛
③前嶋	米分 次分	0.813	0.3428 0.084	川表田地 1.	1.004	1.25 大麦 0.5	百姓 舛や助右衛門
④とうか坪	次分 五歩	0.628	0.009 0.05	上 田 地 1.	1.	1.35	五位川保 百姓清五郎
⑤上ノ田	五歩	0.707	0.10135		1.013	2. 大麦 0.5	宝寺 百姓又兵衛
⑥ほうしの木	五歩	1.112	0.1425	上 田 地 0.25	1.71	2.75	五位川保 百姓四 平
⑦内座田畑	五歩	0.106	0.0126	川表田地 0.02	0.202	定納 0.14	内座 百姓浅 七
⑧車道大通畑	五歩	0.326	0.031	下 田 地 0.43 川表田地 0.4	0.425	定納 0.43	関戸保 甚 兵 衛

注1) 寛政5年11月「⁽²⁰⁾田畑反畝歩五歩高并ニ田地方石掛り高百姓宛高覚」より作成。

注2) 宛高と宛米高については、原文書では前者が「石掛り高」、後者が「宛米」などとなっているが、表1と統一するため、ここでは表中の用語を使うことにする。

歩の土地が入り交じっている。神田が神田年貢を、五歩が掛りものをそれぞれ課せられる土地であることは、すでに述べた通りである。そして、神田高はそのままの高が年貢高を、また五歩の土地は実質高の十分の一の高が掛りもの高をそれぞれ表示することも指摘しておいた。この時期には、すでに神田の米分・次分も五歩の土地と同様売買の対象となっていた点は注目される。元来、売買禁止の米分・次分の神田も、社家がその年貢高を請け負う条件さえ満たせば買得できたのである。

ところで、水帳反別と水帳石高は、「家領水帳」の各土地の冒頭に記される基本的な反別と高であった。また、先述したように、宛高は上田地中・下田地中・川表田地中の三田地中によって把握された高である。表2からは、八筆がどの田地中に属していたのか判明する。この二つの高についてはすでに言及したので、本節では、第三の高の宛米高について検討を加えていく。まず、同表で特徴的なのは、宛米高反別が揭示されていることである。いま、その水帳反別と宛米高反別を比較すると、宛米高反別の方が全般的に面積が広いことが分かる。同じ土地なのに、なにゆえ面積にかくも大きな差が生じるのであろうか。その解答を探るために、先の寛政五年一一月の史料の中から、二字の記載内容を引用することにしよう。

とうか坪
一壺反

宛口壺石三斗五升

百姓五位川保
清五郎

水帳高ハ六畝廿八歩

但^{五歩}次分二口二て

五歩高 上田地石掛り高壺石

五升 堤銭

次分

九合出ル

上ノ田
一壺反十三歩

宛口式石

但シ大麦五斗

百姓宝寺
又兵衛

内

上ノ段壺畝八歩

二ノ段式畝五歩

三ノ段式畝十七歩

四ノ段十九歩

下ノ段三畝廿四歩

水帳高ハ六口二而

七畝七歩

五歩高

壺斗壺合三夕五才

定式掛り物は
井手浚之節二
米壺升五合五夕ト
俵壺ツ出ス

これは、表2の④とうか坪と⑤上ノ田の事例である。記載形式と

しては、④とか坪の場合、最初に反別一反、その「宛口」⇨宛米高一石三斗五升、それに請作人の清五郎の名が記される。そのあとに「水帳高」として水帳反別、土地の種別、水帳石高がそれぞれ書き上げられ、さらに、「石掛り高」⇨宛高⇨この場合は上田地中で把握される高⇨が記載される。この土地の種別は、五歩と次分からなる。この二つを合わせた水帳反別は六畝二八歩で、その高は五歩が五升、次分が九合である。反別・高とも「宛口」⇨宛米高のそれと比べてはるかに小さい。そして、第二の高である「石掛り高」⇨宛高は一石で、「宛口」⇨宛米高は二石三斗五升である。

次に、⑤上ノ田の場合、記載順は④とか坪と同じであるが、こちらは「宛口」⇨宛米高反別の内訳が記されている。この土地は、「宛口」⇨宛米高反別一反一三歩、「宛口」⇨宛米高二石・大麦五斗、作人宝寺百姓又兵衛を内容とする土地である。いずれにせよ、最初に宛米高の記載があることから、この帳面が正田家と請作人との請作関係を記録するために作成されたものであるのは自明である。この五歩の土地の⑤上ノ田でも、「水帳高」⇨水帳石高は七畝七歩、高は一斗一合三夕五才で、反別、高とも宛米高の方がはるかに大きい。なお、この土地では、あらかじめ「井手淺之節」に米一升五合五夕と俵一つを出すことが「定式掛り物」として決められているため、「石掛り高」⇨宛高は設定されていない。ところで、この⑤上ノ田は、宛米高反別と水帳反別を比べると、一反・三歩と七畝七歩で大きな開きがある。この大きな差は、いかなる理由によるものであろうか。その点については、次に検討することとし、ここ

では、一つの土地に水帳石高、宛高、宛米高の三つの高が結ばれていたこと、そして、その宛米高反別と水帳反別、さらには宛米高と水帳石高には、それぞれ大きな差があることを確認しておきたい。

(2) 宛米高算定にともなう土地測量

これまで検討したように、水帳石高は離宮八幡宮領の「指出検地」に基づいて設定された高であり、宛高は上田地中・下田地中・川表田地中の三つの田地中によって設定、把握された高であった。この二つの高は、高決定の方法、目的、機能において性格を異にするものであった。それでは、残る一つの高⇨宛米高は、これら二つの高とどのように関連するのであろうか。その第三の高は、土地所持者と耕作人との間で結ぶ請作関係で機能させるため、土地所持者が独自に面積を測量し、その測量結果に基づいて定めた高である。正田家には寛政五年一〇月に実際に測量した記録が伝存しており、その測量の実態をうかがうため、その中から一部を抜粋してみよう。

上ノ田

下ノ町

上五間



山方長十九間

川方十八間半

上七間

下四間

此坪百三坪壹合五夕五 (ママ)

下ノ町合百十四坪

三畝廿四歩



是迄下之町



(129)

このあと順に、「三ノ町」二畝一七歩、「二ノ町」二畝五歩、「上ノまち」一畝八歩の測量結果と部分的な測量図が書き込まれ、末尾の余白部分に「上ノ田惣合」一反一三歩と合計反別が記される。これは、先に引用した寛政五年十一月の史料にある表2の⑤上ノ田を

測量した結果を記帳したものである。そして、ここに抜粋した「下ノ町」がその史料の「下ノ段」、「小まち」が「四ノ段」、また、引用はしなかったが、「三ノ町」が「三ノ段」、「二ノ町」が「二ノ段」、「上ノまち」が「上ノ段」に比定されることは、両者の反別がすべて合致することからも明白である。さらに、「上ノ田惣合」一反一三歩は、「宛口」二宛米高反別の一反一三歩に相当するものである。そこで、右に引用した⑤上ノ田を例にして、その測量方法と測量結果をうかがってみよう。

まず、「下ノ町」のあとに、「上五間」とあって測量図が描かれている。そのあとに「山方長」一九間、「川方」長一八間半、「上」長七間、「下」長四間とそれぞれの長さが記される。そして、「此坪」一〇三坪一合五夕五才が算出される。その面積は、山方長一九間と川方長一八間半との平均値と、上長七間と下長四間との平均値を掛ければ求められる。つまり、土地の縦と横、ないしは東西と南北を掛けて求めた面積なのである。また、「此坪百三坪」の「三」の横に「四」の数字があるのは、端数の一合五夕五才を繰り上げて「百四坪」としたものである。これが、「下ノ町」の土地の中核をなしている。それでは、そのあとの「下ノ町合百十四坪 三畝廿四歩」という数字は何をあらわすのであろうか。その三畝二四歩が一四坪を一畝二〇歩換算で畝表示したものであるのは、容易に理解される。「下ノ町合百十四坪 三畝廿四歩」の数字の根拠は、ここに描かれている二つの測量図にヒントがある。この合計面積のあとにもう一つの測量図が記されている。その測量図の面積は五坪であ

る。そして、最初の測量図の面積が五坪二合五夕であり、この二つの測量図の合計面積約一〇坪（端数は切り捨て）を、先の中核部分の、〇四坪に加えると、一一四坪の合計面積が求められる。これが、⑤上ノ田のうち「下ノ町」の合計面積一一四坪＝三畝二四歩に他ならない。後の測量図のあとに「是迄下之町」とあって、その測量図までが「下ノ町」の分と断っている。

このように、土地所有者である疋田氏は、一筆ごとの土地を独自に測量してその面積を算定したのである。その場合、必要に応じて測量図を作図した。また、「小まち」では測量図だけで、縦・横、ないしは東西・南北の間数、面積合計の数字の記載はない。その測量図で「小まち」の面積一九坪＝一九歩が把握された。こうした測量に基づいて求められた面積に対し、高＝宛米高が設定された。その宛米高が、請作のときの請作人の請負高となったのはいうまでもない。ここで引用した史料には、このほか前出の寛政五年十一月の史料にある八筆の土地すべての測量結果が記されている。したがって、先の寛政五年十一月の史料が、同年一〇月に実施した測量結果を書き上げた帳面であることは明瞭である。そして、この宛米高が請作人から納められる「年貢米」⁽²²⁾であることは、次の史料の内容からはつきりと読みとれる。比較のため、前節で引用した芝走＝芝はつれ畑の部分抽出してみよう。

芝はつれ畑
一宛米三石三斗

五位川七兵衛
長三郎
溝口町作兵衛
忠兵衛

同所
一米壹斗五升

忠兵衛
作兵衛

同所
一同式斗五升

溝口七兵衛
長三郎

右二口之畑荒故皆無、地能成候へハ見分之上年貢申付ル筈也

右三口にて三石三斗ニ宛置申候

此次分八斗八合五夕 二畝十六歩半

内野石かけ三石三斗五升 水帳写也

敷地年貢四歩之割

堤銭

未とし 壹石六斗五升納

作兵衛

同 壹石六斗五升納

七兵衛

メ三石三斗取

この次分の例では、宛米高三石三斗を七兵衛（長三郎名義）と作兵衛（忠兵衛名義）とで、宛米高一斗五升を忠兵衛と作兵衛とで、宛米高二斗五升を七兵衛と長三郎とで、それぞれ三口分合計三石七斗の宛米高を請作している。しかしながら、そのうち後者の二口は、「右二口之畑荒故皆無」とあるように、畑荒のため「年貢」を免除している。その二口は、「地能成候へハ見分之上年貢申付ル」として、地力が回復すれば「年貢」＝請作米を上納させることになっていた。しかし、それまでは、三口分で三石三斗を「宛置」くことになる。実際、宛米高三石三斗分は、作兵衛と七兵衛が一石六斗五升ずつ請け負い、それぞれ同量の請作米を納めている。これに

より、宛米高が請作による「年貢米」の高であることが確認される。ここでも、水帳石高や宛高の高は一切機能していないのである。この宛米高は、地主的性格をもつ土地所有者の正田家が請作人と取り決めた請作高Ⅱ「年貢高」をあらわしている。しかも、その高は、正田家自らが土地を測量して定めた高であった。

おわりに

以上、離宮八幡宮領における三つの高の性格について分析を加えてきた。その結果、一つの土地に付された水帳石高、宛高、宛米高の三つの高が、それぞれその機能において固有の役割をもっていたことを知りえた。

まず、水帳石高は、基本的な高ではあっても、その高が領内の土地経営のすべてにおいて機能するわけではなかった。水帳石高は、在所Ⅱ惣中を維持、運営していくための年貢・諸掛りを算出するときにのみ、その算定基礎の高として機能した。その場合でも、前掲図1の土地構成のうち、神供祭礼分を構成する米分・次分Ⅱ神田と灯明分は、その高がそのまま年貢高となるが、寺庵・社僧分や杜家分の五歩は、実質高の十分の一に縮めた高が掛りものの高となるなど、水帳石高は、在所Ⅱ惣中で取り決められた作為的な高に過ぎなかった。また、大山崎惣中は、形式上無高の神領として領域の支配権が認められていたが、その見返りとして幕府に対し一定の義務が課せられた。その中に馬借用掛りと国役掛りがあり、この掛りものも水帳石高がその算定基礎として利用された。水帳石高が機能した

のは、このような在所Ⅱ惣中に収納される年貢や諸掛りものを算出するときだけである。

次に、宛高は、史料中では「田地石掛り」高、「宛高」などと称され、その高は、領内に組織された上田地中・下田地中・川表田地中の三つの田地中によって掌握された。各田地中では、米分・次分の神田や五歩の土地の区別なく、田地中に属する一筆ごとの土地に宛高を設定するとともに、必要に応じて毛見を実施して等級を改めている。この宛高は、専ら田地中内の土地に賦課する「敷地石掛り」と「廿三日用掛り」を算定するときに使われた。二つの掛りものは、すべて当該の田地中に納められ、田地中では、この二つの掛りものを主な財源として、田地中に属する土地の維持、管理にあたった。ここでは、水帳石高ではなく、土地管理集団が独自に設定した高Ⅱ宛高を機能させたのである。宛高は、水帳石高が計算上の高であったのに比べ、田地中によって土地の面積が把握され、それに基づいて設定された高であった。ただ、測量の実態や高の設定基準については、現在のところ、史料的制約もあって確定しえない。今後の研究を俟ちたい。

最後に、土地所有者、この場合、地主的性格を備えた土地所有者が請作に出すときに機能させる、「宛口」「宛口高」などと呼ばれる宛米高があった。土地所有者にとっては、直接、経営収支に影響するだけに、この宛米高に対して強い関心が向けられた。面積把握のために自ら測量をし直して請作高Ⅱ「年貢高」を算定していることが、そのことを如実に物語っている。この宛米高は、基本的には宛

高と同質であったと考えられる。そして、宛高と宛米高の差は、測量結果の面積の増減や「年貢」免除の有無によって生じるものである。

これまで述べてきたように、石高制の基礎となる水帳石高は、土地の実態を表現しただけでなく、離宮八幡宮領内におけるすべての掛りものの算定基礎となったわけではない。領内の土地を管理する田地中は、その運営経費を賄うために、独自の高を設定し、その高に基づいた掛りものを集めてその財源とした。社家が地主的経営を行う場合でも、自らが測量した面積によって高を設定し、それを請作高として機能させた。水帳石高は、在所惣中に納める米分・次分Ⅱ神田年貢、ないしは五歩掛りⅡ田地・地子などを計算するときに機能しただけである。本稿は、近世の石高制を考える糸口として、以上のような離宮八幡宮領における三つの高の性格について素描を試みたにすぎない。したがって、論理的にも不備な点が残るが、ともかく現在知りえた高の問題を提示し、大方のご批判を仰ぐこととした。

注

- (1) 吉川一郎『大山崎叢考』(一九五三年)や、今井修平『近世大山崎離宮八幡宮領の構造』(「ヒストリア」第九七号、一九八二年)などで指摘されている。
- (2) 代表的なものとして、安良城盛昭『幕藩体制社会の成立と構造』(御茶の水書房、一九五九年)を挙げておく。
- (3) 拙稿「前田領における検地の性格について」(『史学雑誌』一〇二—一〇、一九九三年)や同「前田領の「免」に関する試論」(『奥能登と時国

家』研究編二、二〇〇一年)などで主張している。

- (4) 秀村選三「石高制の関する二つの問題」(『経済学研究』二九—一、一九六三年)。

- (5) 『大山崎町史 本文編』(一九八三年)。

- (6) 川鍋定男「無高の離宮八幡宮領と検地、安堵」(一九九八—二〇〇一年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇二年)では、離宮八幡宮領の検地が「指出検地」であったと結論づけている。

- (7) 正田種信家文書「宝暦七年丑年之掛り者二而地方掛り物掛り様手引帳」。

- (8) 前掲『大山崎町史 本文編』。

- (9) 拙稿「近世中期以降における離宮八幡宮の経営と社家経営」(『明治政府の社寺支配過程の総合的研究』、一九八七年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、一九八八年)。

- (10) 拙稿「大山崎離宮八幡宮領における年貢・諸掛りの性格について」(『山城国大山崎荘の総合的研究』、一九九八—二〇〇一年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇二年)。

- (11) 泉雅博「近世における一社家の土地経営」(『明治政府の社寺支配過程の総合的研究』、一九八七年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、一九八八年)に、「家領水帳」の詳しい説明がなされているので参照されたい。

- (12) 神田の場合は、社家が年貢を請け負ったことから「請け負う」という用語を、また、五歩の土地の場合は、社家の土地に対する所有権が強いことから「支配する」という用語をそれぞれ使用する。

- (13) 前掲拙稿「大山崎離宮八幡宮領における年貢・諸掛りの性格について」。

- (14) この敷地年貢石掛りは、見出し標題として「敷地石掛」の「敷地」と「石掛」の間に○があつて、その横に「○年貢」となっている。これは、はじめ「敷地石掛」と書いて、そのあとに「○年貢」を追記したものである。五歩の土地だけなら「敷地石掛」の表記でよいが、米分・次分Ⅱ神田も賦課の対象となったので「年貢」が書き加えられたのかも知れない。

- (15) 正田種信家文書「文化三年寅八月中之上内野田地石高改帳三冊之内」、「文化三年寅八月下之上内野田地石高改帳三冊之内」。

- (16) 正田種信家文書「(年未詳) 上田地割合覚」。
- (17) 前掲拙稿「大山崎離宮八幡宮領における年貢・諸掛りの性格について」。
- (18) 原史料では、離宮八幡宮に納める米分・次分Ⅱ神田年貢も「年貢」と称し、請作関係にある請作人が地主(この場合、主に社家)へ納める請作料も「年貢」と呼んでいる。本稿では便宜的に前者を単に年貢とあらわし、後者を「年貢」とあらわすことにする。
- (19) 正田種信家文書「寛政五年丑十一月吉日改田畑 地子反畝歩 五歩高并二田地 地方石掛り高百姓宛高覚」。
- (20) 正田種信家文書「嘉永子五年収納米取立」や「嘉永丑六年収納米取立」の標題部分に記されている。
- (21) 正田種信家文書「寛政五年十月吉日 反畝歩之覚」。
- (22) この場合の「年貢米」は、当然ながら、米分・次分Ⅱ神田に課せられる神田年貢とは異なる。明らかに請作人が地主に納める地代分を指している。それを「年貢」と表現すること自体、社家の土地に対する領主的な土地支配権の強さを示唆する。
- (23) 正田種信家文書「宝暦元年未ノ十一月吉日 年貢収納 地子 畑方 扣帳」。

〔付記〕本稿を作成するに際しては、史料所蔵者の正田種信氏には史料の調査・閲覧を快諾していただきました。改めてお礼申し上げます。昨年九月には、私たち調査団をいつも暖かく迎え入れていただきました奥様の志津様のご逝去されました。研究調査の成果をご報告しなければと思っていた矢先のことです、私たちの力不足を悔むばかりです。心よりご冥福をお祈り申し上げます。